

令和4年度の研究(または活動)内容

生活環境と一体となった身近な地域文化財や伝統文化は、長い年月をかけて地域で醸成されたサステイナブルな「伝統知」を備える。すなわち地域文化財には「持続可能な地域づくり」のヒントが秘められている。本プロジェクト研究所は建築史、地域防災、環境保全、映像学、歴史資料学といった、人文学と建築学、環境学にまたがる異分野融合と地域連携を重視し、「文化財の価値を守り、未来へ伝え、持続可能な地域づくりへ活かす」という複合新領域の形成を目指すものである。

各地の研究活動としては、以下の地域プロジェクトを学内の異分野融合の体制で進めた。フィールドおよび研究体制の枠組みは前年度(1年目)を継続している。一方、後述するようにこれらフィールド・研究体制を超えた統合的事業(みやぎ県民大学等)も実施することができたことが本年度の大きな特徴である。

- 1) 歴史的町並みの文化財的価値を守る防災計画 : 文化財保存×地域防災【青森県弘前市】
- 2) 地域の魅力を伝える映像づくり : 建築学×映像学【宮城県登米市】
- 3) SDGs環境学習プログラムの実践 : 文化財保存×環境工学【宮城県石巻市、登米市】
- 4) 地域文化財の新たな価値評価手法 : 建築史×歴史資料学【岩手県奥州市】

本年度は研究所設立2年目にあたる。そのため、上記の研究活動そのものもさることながら、1年目(2021年度)に始動させた各地の地域実践プロジェクトの取りまとめを意識した活動を実施した。その成果のひとつは、地域文化財研究の複数の研究メンバーが執筆分担するかたちでの自治体刊行物の成果公表である。岩手県奥州市教育委員会から『旧高野家住宅―高野長英旧宅・古稀庵・新座敷ほか』を刊行し(2023年3月)、歴史資料学(河内講師)と建築史学(中村准教授)が連携した歴史的建造物の「総合的評価」の新機軸を示した。また弘前市教育委員会から、2年間の文化財防災研究を取りまとめた『弘前市仲町伝統的建造物群保存地区防災計画見直し調査報告書』を刊行し(2023年3月)、中村准教授が全体編集および歴史的町並みの雪害対策について、畠山教授が水害対策について成果を執筆した。

異分野融合を意識した市民講座やワークショップの実施も、活動の重点とした。本年度のこうしたアウトプットにより、複数の学問領域が融合しながら、それらが具体的な「地域づくり」へと収斂していく一覽性の高い視点を、社会的にも示すことができたと考えている。その一例として、本年度に地域文化財研究所が企画した「みやぎ県民大学」の実施状況を以下に示す。

【異分野融合の地域研究を、わかりやすく市民へ紹介】

みやぎ県民大学「東北の歴史・文化を知り、SDGsへつなぐ」の開講

宮城県受託事業として、学校開放講座「みやぎ県民大学:東北の歴史・文化を知り、SDGsへつなぐ」を実施した。研究所メンバーから4名が連続講座の講師として参画し、一連の受講によって、異分野融合型の研究活動が地域のSDGsへつながる視野を、具体的なフィールドに基づき紹介した。その講義内容は以下のように、人文学、建築学、環境工学にまたがりつつ、「伝統工法の実演」「ヨシのデザイン制作」などの工夫で、専門家でない市民に対しても、わかりやすさを意図して企画した。受講者は22名で、高

校生及び他大学からの大学生の若い受講者もあり、多世代の関心を得うるテーマだと実感している。

第1回 10/1(土)【歴史学】郷土を顕彰した東北の人びと:総合教育センター 河内聡子 講師

第2回 10/22(土)【映像学】歴史的町並みの魅力を伝える映像づくり:

経営コミュニケーション学科 猿渡学 教授

第3回 11/19(土)【建築学】自然素材からなる伝統建築のエコロジー:建築学科 中村琢巳 准教授

第4回 11/26(土)【環境学】北上川流域のヨシ原の生態に学ぶ:環境応用化学科 山田一裕 教授



猿渡教授による映像づくりの講義



ヨシのワークショップを取り入れる



大工の実演と伝統技術解説

【異分野融合による複合新領域の学術的深化】

地域研究から町並みの災害レジリエンスを高める視点へ

複合新領域の形成という学術面では、本年度はとりわけ、「文化財防災」の分野で成果や研究視座を深めた。それは、本学が位置する東北地方が2022年3月の福島県沖の地震の影響を受けたことにも起因する。

岩手・宮城・福島 of 歴史的建造物被災調査も進め、その調査概要や文化財防災の視野を日本建築学会東北支部(6/18)、日本建築学会大会(9/8)、日本建築学会東北支部建築史・意匠部会(3/19)と連続して学会報告した(中村准教授)。3月19日に開催した日本建築学会東北支部建築史・意匠部会シンポジウムは中村准教授が企画立案し、研究所メンバーの山田教授も交えて「歴史的建造物がつしなやかさ(レジリエンス)ー被災・修理を社会学・環境学の研究者も交えて考える」と題して、本研究所のリソースを活用することで学際的に開催することができた。

現在、防災学で着目されているレジリエンス(しなやかな回復力)は、本研究所が目指している地域がもつ「伝統知」(自然との共生、災害への伝統的な備え)を見つめ直し、その継承・発展として、災害レジリエンスの向上へとつながると思料と親和性をもつ。たとえば、本プロジェクト研究のフィールド研究として進めている、「雪害対策としての伝統的な雪囲いの復権」「過去の水害の住民ヒアリングによる災害復元」「伝統建築の材料を供給するヨシ原の再生」等は、地域研究をレジリエンス向上へつなぐ有力なテーマだと考えている。次年度以降も、こうした複合新領域の各事例を統合するテーマの深化を目指したい。

